

自分史(荒川区尾久在住 I さん 86 歳)

## 目次

### はじめに: 一人の職人デザイナーの軌跡と学び

#### 第 1 章: 戦中・戦後を生きた幼少期

- ・ 昭和 14 年、浅草橋での誕生
- ・ 家族の記憶 —桐たんす職人の父と日本舞踊の祖母—
- ・ 戦時中の疎開体験 —東急池上線の雪谷へ—
- ・ 空襲と焼け出された日々
- ・ 戦後の暮らしと時代の変化 —桐たんすから洋ダンスへ—

#### 第 2 章: デザインとの出会い

- ・ 都立工芸高校でのデザイン学習
- ・ 父の仕事からの影響
- ・ 若きデザイナーとしての夢と志

#### 第 3 章: 一流デザイナーの下での修業時代

- ・ 日本デザインセンター時代
- ・ 亀倉雄策氏と永井一正氏に学んだ日々
- ・ 一流企業のデザイン案件と競争の世界

#### 第 4 章: フリーランスデザイナーへの道

- ・ 独立の決断と挑戦
- ・ フリーランスの先駆けとして
- ・ 大手企業との競争と勝負の日々

## 第 5 章: デザイナー筋の仕事人生

- コンペを勝ち抜く戦略と努力
- 記憶に残るプロジェクト —大学パンフレットと文庫本の表紙—
- デジタル時代の幕開け —PC との出会いと活用—
- フリーランスの仲間たちとの連携

## 第 6 章: 仕事に生きた日々の風景

- 寝る間も惜しむ仕事への情熱
- 真夜中の帰宅とバイク通勤の日々
- 一人でも飲む、仕事の合間の楽しみ
- 精神力と創造性の源泉

## 第 7 章: 仕事を離れての新たな人生

- デザイン学校の用務員として
- 若い世代との交流と刺激
- 子どもたちとの触れ合い

## 第 8 章: 山と旅を愛する人生

- 山登りの思い出
- 遭難しかけた冒険談
- ヨーロッパ一周の旅
- スキーの楽しみ

## 第 9 章: 人生を振り返って

- デザイン 70 年の軌跡

- 過ぎゆく時間と変わらぬ喜び —「何年生きようがコーヒーは美味しい」—
- 自分の選択と面白さを追求した人生
- 次世代へのメッセージ

# はじめに：一人の職人デザイナーの軌跡と学び

本自分史は、昭和 14 年生まれのデザイナーが辿った半世紀以上にわたる職業人生と、そこから得られた学びの記録です。戦中・戦後の混乱期に幼少期を過ごし、父親の桐たんす職人としての仕事に影響を受けて都立工芸高校でデザインを学んだ筆者は、日本デザインセンターでの修業を経て、当時としては珍しいフリーランスデザイナーとして独立の道を選びました。

一人デザイナーとして大手デザイン事務所や広告代理店と競い合い、50 年にわたり第一線で活躍した経験からは、特に以下のようなビジネス的学びが導き出されます：

## 1. フリーランスデザイナーの先駆けとなった先見性と革新性

組織所属が当然の時代にフリーランスという道を選び、PC など新技術をいち早く導入した先見性が成功をもたらしました。常に時代の変化を察知し、技術革新を恐れず取り入れながらも、「人の心に届くデザイン」という本質を守り続けました。

## 2. 機動力とスキルとモーレツな仕事による成功の掛け算

一人デザイナーの弱点を、圧倒的な機動力と専門スキル、そして仕事への情熱で補いました。迅速な意思決定や直接対話の強みを活かし、他のフリーランス専門家と柔軟に連携するネットワーク型協業を実践。「個のカ×ネットワーク×情熱」の掛け算が持続的成功を生み出しました。

## 3. 仕事と人生の境界を設計した全人的アプローチ

激務の中でも山登りや旅行を大切にし、70 歳を過ぎてデザイン学校での新たな役割を見出しました。異なる体験が創造性を育み、世代間交流が新鮮な視点をもたらすことを実証。「自分で面白いと思うことを選び、全力を注ぐ」という哲学が、仕事と人生の両面で充実をもたらしました。

## 第 1 章: 戦中・戦後を生きた幼少期

昭和 14 年 8 月 21 日、東京の浅草橋で私は産声を上げました。この年、ヨーロッパではすでに第二次世界大戦が始まっており、日本も中国大陆での戦闘を拡大させていた時代です。私が生まれた夏の日、東京の街は平和な日常が続いているように見えたのですが、大人たちの会話には不安の色が混じり始めていたことでしょう。

幼い私の記憶に残る我が家は、職人の家らしい独特の雰囲気にも包まれていました。父は桐たんすの金具を作る名人として知られていました。日本橋の工房で、「卓三の番頭さん」と呼ばれ、多くの人に尊敬されていたのです。父の手は常に木の香りと金属の匂いを纏っていました。今でも鮮明に覚えているのは、その大きな手のひらに刻まれた無数の小さな傷痕。それは長年の職人生活が刻んだ勲章のようでした。

私たちの家には今も、父が手がけた金具が取り付けられた古い桐たんすと、比較的新しいものが並んでいます。そのたんすの引き出しを開けると、今でも微かに桐の香りがし、子ども時代に戻ったような気持ちになります。父が手がけた金具は単なる機能部品ではなく、一つひとつがデザインされた芸術品でした。蝶番や取っ手の曲線、鍵穴の周りの装飾など、細部にまで美しさを追求する父の姿勢は、後に私がデザインの道を選ぶ大きな影響となりました。

祖母は別の意味で厳格な芸術家でした。日本舞踊の先生として多くの弟子を育て、地域では知られた存在でした。祖母の姿勢の美しさ、所作の繊細さは今も私の脳裏に焼き付いています。舞踊の稽古の音が家中に響き渡る日々。祖母の厳しい指導の声と、三味線の音色が私の幼少期のサウンドトラックでした。

祖母は芸術に対して妥協を許さない人でしたが、普段の生活では質素を旨としていました。最期を迎える頃、「うなぎが食べたい」とぼつりと漏らしたそうです。しかし戦後の混乱期、うなぎは一般家庭では手が届かないほど高価なものでした。その願いを叶えられなかったことは、私の中に小さな後悔として残っています。私が学生だった頃、祖母は静かにこの世を去りました。その葬儀の日、私は祖母から受け継いだ美への感性を大切にしようと心に誓いました。

戦争が本格化するにつれ、東京は危険な場所となりました。私が5歳になる前、家族は東急池上線の雪谷へと疎開しました。父の仕事仲間の伝手だったと聞いています。雪谷は当時、まだ東京の郊外で、緑も多く残っていました。疎開先での私の記憶は断片的ですが、初めて見る田園風景や、空を見上げて飛行機の音に怯えた感覚は今でも鮮明です。

東京の空襲は想像を絶するものだったと大人たちは語っていました。私たちの本来の家は焼け落ち、父が丹精込めて作った多くの道具や、祖母の大切な舞踊の衣装も灰になりました。疎開先での生活は物資不足で苦しいものでしたが、家族の絆だけは強く保たれていました。父は時折、隙間時間に小さな木片を彫っては私にくれました。その木の動物たちは、戦争の暗い影の中での小さな光でした。

終戦後、日本社会は急速に変化していきました。父の仕事にも大きな変革の波が押し寄せました。伝統的な高級桐たんすは贅沢品となり、代わってベニヤ板で作られた安価な洋ダンスが一般家庭に広がっていきました。父は時代の変化に戸惑いながらも、自分の技術を活かす道を模索していました。

ある日、父が新しい図案を描いている姿を見て、私は強く心を動かされました。単なる金具ではなく、時代に合った新しいデザインを生み出そうとする父の姿勢。伝統を守りながらも革新を恐れない精神。それは私の中に、「デザイン」という言葉を宿す最初の瞬間だったかもしれません。

父の仕事場では、金属が輝き、木が香り、図面が広げられていました。そこには日本の伝統美と実用性が融合する空間がありました。私はその空間で遊びながら、美しい「かたち」と「はたらき」の関係を無意識に学んでいたのです。父が金具に施す装飾の一つひとつには意味があり、それは単なる飾りではなく、使い手の心を豊かにするためのものでした。

戦後の復興期、日本の家庭は急速に西洋化していきました。和室から洋室へ、畳からフローリングへ、着物から洋服へ。その変化の中で、父の作る桐たんすの金具も進化を余儀なくされました。時には洋風のデザインを取り入れ、時には従来の和風美を残しながら新機能を追加する。その試行錯誤の日々を見ていた私は、「伝統と革新の融合」というデザインの本質を、言葉ではなく体験として学んでいたのです。

夜になると父はよく私を膝に乗せ、一日の仕事の様子を語ってくれました。特注品の金具がどうしてその形になったのか、どんな工夫が施されているのか。それは幼い私にとって、最高の「デザイン講座」でした。父の語る言葉の端々には、常に「使う人の喜び」への配慮が感じられました。美しさだけでなく、使いやすさを考え、長く愛される製品を作る—その姿勢は、後に私がデザイナーとして歩む道の原点となりました。

戦争と復興、そして急速な社会変化。私はそんな激動の時代に幼少期を過ごし、伝統工芸の職人である父と芸術家である祖母から、美と機能の調和という貴重な感性を受け継いだのです。その血筋が、やがて私をデザインの世界へと導くことになるのは、当時の私は知る由もありませんでした。

## 第 2 章: デザインとの出会い

中学校を卒業する頃、多くの同級生が普通科高校や商業高校へと進路を決めていく中、私の心は別の場所へと向かっていました。幼い頃から父の仕事場で触れてきた「美しさと機能性の融合」という世界に、私は自分の将来を見出していたのです。

「デザインを学びたい」

その思いを胸に、私は都立工芸高校の受験を決意しました。文京区にあるこの高校は、戦後の日本のデザイン教育の先駆けとして知られていました。入学試験で私は緊張しながらも、父から受け継いだ「かたち」への感覚を信じて臨みました。

合格通知を手にした日の喜びは今でも鮮明に覚えています。父は普段は寡黙な人でしたが、その日ばかりは満面の笑みを浮かべ、「やはりお前には職人の血が流れているんだな」と言ってくれました。その言葉は私にとって何よりの励みとなりました。

都立工芸高校での日々は、目の前に広がる可能性に胸躍る毎日でした。校舎に一歩足を踏み入れると、様々な材料と道具の香りが混ざり合う独特の空気が漂っていました。木工室からは鉋(かんな)の音、金工室からは金属を叩く音、印刷室からはインクの香り。それは私にとって、父の仕事場の延長線上にあるような親しみと、未知の世界への期待が入り混じった空間でした。



高校では「基礎デザイン」「色彩学」「図案」「製図」など、デザインの基礎を徹底的に学びました。最も印象に残っているのはデザインの授業です。デザインの先生は戦前からのデザイン教育者で、日本の伝統美と西洋のモダンデザインの両方に精通した方でした。

「デザインとは問題解決だ。美しいだけでは足りない。使う人の心と暮らしを豊かにするものでなければならない」

先生のこの言葉は、私のデザイン哲学の原点となりました。それは父が金具を作る際に常に念頭に置いていた「使い手の喜び」という考え方と見事に重なり、私の中で強く共鳴したのです。

高校時代、私が特に得意としたのは「構成」の授業でした。与えられた条件の中で最も効果的な配置や比率を見出していく作業は、私にとってパズルを解くような楽しさがありました。また、手描きの技術にも自信がありました。父の仕事場で図面を見慣れていたせいか、精密な線を引くことには他の生徒よりも抵抗が少なかったのです。

当時の日本は高度経済成長期の入り口に立っていました。街には新しい建物が次々と建ち、家電製品やファッションなど、あらゆるものが「デザイン」という言葉を意識し始めた時代です。伝統的な職人技と新しい産業デザインの融合が模索される、創造性に満ちた空気が社会全体を包んでいました。

東京オリンピックの開催が決まり、日本中が未来への希望に満ちていました。デザインの世界でも、伝統と革新の融合による「日本的モダニズム」が国際的に注目を集め始めていたのです。私たち工芸高校の生徒は、そんな時代の空気を敏感に感じ取りながら、自分たちが次代のデザインを担うという使命感と高揚感を抱いていました。

3年生になると、進路選択の時期がやってきました。多くの同級生は美術大学や専門学校への進学を選びましたが、私の心は「現場」に向かっていた。理論よりも実践、教室よりも現実の仕事の中でデザインを学びたいという強い願望があったのです。それは職人である父の血が騒ぐ感覚だったのかもしれませんが。

高校の恩師の先生は、私の決断を聞いて少し驚いた様子でしたが、こう言ってくれました。「君は目の鋭さと手の確かさを持っている。それに何より、君には職人の家に

育った『ものづくりの魂』がある。大学で学ぶことも大切だが、君のような感性は現場でこそ磨かれるものかもしれないな」

その言葉に背中を押され、私は高校卒業後、すぐに就職の道を選びました。しかし、いきなり独立するのではなく、まずは一流のデザイナーの下で修業を積む必要があると考えていました。「いつかは自分の名前で仕事をしたい」という夢を胸に秘めながら。

高校での3年間は、私にデザインの基礎技術と知識を与えてくれただけでなく、「なぜデザインをするのか」という根本的な問いへの答えを見つける時間でもありました。それは単なる職業選択ではなく、父から受け継いだ「美と機能の調和を追求する姿勢」を、新しい時代と文脈の中で実現していく道だったのです。

卒業式の日、校長先生は私たちに「日本の美しさと新しい時代の機能性を融合させる使命を担う世代」と語りかけました。その言葉を胸に、私は高校の門を後にし、プロのデザイナーとしての第一歩を踏み出す準備を始めたのです。

### 第3章: 一流デザイナーの下での修業時代

高校を卒業して間もなく、私は広告会社で働き始めました。そこでの日々は忙しく、厳しいものでしたが、商業デザインの基礎を学ぶには絶好の環境でした。しかし、私の心は常により高みを目指していました。業界では「日本デザインセンター」という名前が、特別な響きを持って語られていたのです。

当時の就職市場は、高度経済成長の波に乗って活況を呈していました。特に広告やデザイン業界は、日本企業の国際進出や東京オリンピックの開催決定を受けて、急速に拡大していた時期です。そんな中、デザイナー志望の若者たちが憧れたのは、創造性と商業性を高い次元で両立させていた「日本デザインセンター」でした。

転職を決意した私は、作品集を何度も作り直し、緊張の面接を経て、ついに念願の日本デザインセンターへの入社を果たしました。入社初日、オフィスに足を踏み入れた瞬間、そこには高校時代とは比較にならない緊張感と創造的な空気が満ちていました。

日本デザインセンターの名声を不動のものにしていたのは、創設者の一人である亀倉雄策さんの存在でした。亀倉さんは東京オリンピックのポスターや企業のロゴデザインなど、日本を代表する数々の作品を手がけた巨匠です。若いデザイナーたちは皆、一度でも亀倉さんの眼に留まることを夢見ていました。

センターに入って間もない私は、主に資料整理や製図の補助など、地味な仕事を担当していました。しかし、そんな日々の中でも、一流デザイナーたちの仕事ぶりを間近で見られることが、何物にも代えがたい学びでした。特に印象的だったのは、彼らがクライアントからの要望を聞く姿勢です。単に言われた通りに形にするのではなく、その背後にある真の課題を見抜き、時には提案を覆すような創造的な解決策を示す—その姿には、デザイナーとしての矜持と自信が感じられました。

入社から半年ほど経ったある日、運命的な出会いがありました。亀倉さんの右腕として活躍していた永井一正さんのチームに配属されたのです。永井さんは亀倉さんよりも若い世代で、伝統的な日本美と国際的なモダニズムを融合させた独自のスタイルを確立していました。その作品は力強さと繊細さが同居する不思議な魅力に満ちていて、私は以前から強く惹かれていました。

永井さんとの最初の仕事は、ある食品会社のパッケージデザインでした。私はデザイン案のラフスケッチを何十枚も描き、永井さんのチェックを受けました。厳しい指摘が多かったものの、その一つひとつが核心を突いたもので、私はメモを取りながら必死に吸収しようとしていました。

「このデザインは何を伝えたいんだ？」「線が多すぎる。削ぎ落とせるものはないか？」「ターゲットは誰だ？その人の生活の中でこの商品はどう存在するんだ？」

永井さんの問いかけは、常に本質に向かっていました。それは高校で学んだデザイン理論とは違う、現場から生まれた知恵でした。特に印象的だったのは、永井さんが「余白の力」について語ったことです。

「白い部分は空白ではない。そこにこそ見る人の想像力が宿る場所なんだ」

こういった考え方は、父が金具を作る際に「使わない部分も大切」と言っていたことと通じるものがあり、私の中で深く共鳴しました。

日本デザインセンターの仕事環境は、創造性と厳格さが同居する独特のものでした。朝は早く、夜遅くまで働くのが当たり前でしたが、誰もそれを苦とはしていませんでした。給与は決して高くありませんでしたが、一流企業からの案件に関われることが、若いデザイナーにとっては何よりの報酬でした。

当時のセンターには様々な個性を持ったデザイナーが集まっていました。伝統派と革新派、感覚派と理論派…時に激しい議論が交わされることもありましたが、それが作品の質を高める原動力になっていました。特にコンペの前日は、オフィスに泊まり込むこともあり、朝まで続く作業の中で交わされる先輩デザイナーたちの会話は、デザイン学校では学べない貴重な知識の宝庫でした。

最も記憶に残っているのは、ある大手電機メーカーのコーポレートアイデンティティ(CI)プロジェクトです。複数の広告代理店やデザイン事務所が競うビッグプロジェクトで、センターにとっても重要な案件でした。永井さんのチームに入って1年ほど経った私は、そのプロジェクトの一部を任されました。

そのプロジェクトでは毎晩遅くまで作業が続き、時には朝を迎えることもありました。永井さんはメンバー全員のアイデアに耳を傾け、一見突飛に見える提案でも、その可能性を最後まで検討する姿勢を持っていました。そして最終的に採用されたのは、実は私が提案したモチーフを基にしたデザインだったのです。

「君の感覚は面白い。まだ荒削りだが、独自の視点がある」

永井さんからそう言われた日は、デザイナーとしての自信が芽生えた瞬間でした。その後も様々なプロジェクトに関わる中で、私は自分の「見る目」と「表現力」を磨いていきました。

センターで働いて3年目を迎えた頃、デザイン業界にも大きな変化の波が押し寄せていました。それはパーソナルコンピュータの登場です。初期のPCは今から見れば非常に原始的なものでしたが、その可能性に目を付けたのは永井さんでした。彼はいち早くセンターにPCを導入し、若手にその活用法を模索するよう指示しました。

多くの先輩デザイナーたちは懐疑的でしたが、私は直感的にその可能性を感じ取りました。独学でプログラムを学び、PCを使った新しいデザイン表現を試みたのです。

当時はマニュアルもほとんどなく、試行錯誤の連続でしたが、それが後に独立した際の大きな武器となりました。

「これからのデザインは、手と目だけでなく、新しい技術も味方につけなければならない」

永井さんのこの言葉は、私のデザイナー人生の指針となりました。伝統的な職人技と最新技術の融合—それは父の桐たんすの金具づくりから連なる私の血の中の感覚と、時代の最先端を生きる感覚が出会う瞬間でした。

日本デザインセンターでの5年間は、私にとって真のデザイナーとしての基礎を形成した貴重な時間でした。亀倉さんの大局的な視点、永井さんの繊細な感覚と革新性、そして数々のプロジェクトで培った実践的なスキル。それらすべてが、やがて私が独立する際の糧となったのです。

センターを去る決断をしたとき、永井さんは静かに私の肩を叩いて言いました。「君ならやれる。ただし、自分の目と感覚を信じることだ。そして決して妥協するな」

その言葉を胸に、私は独立への道を踏み出す準備を始めたのです。

## 第4章: フリーランスデザイナーへの挑戦

日本デザインセンターでの充実した日々を過ごす中、私の心には次第に新たな挑戦への渴望が芽生えていました。それは「自分の名前で仕事をする」という、デザイナーとしての究極の夢でした。1970年代初頭、日本ではデザイナーが組織に属することが当然とされていた時代。デザイン事務所や広告代理店、企業のデザイン部門で働くのが一般的な道筋でした。

「フリーランスのデザイナーとして独立する」

その言葉を口にしたとき、多くの先輩や友人は驚きの表情を見せました。「才能があっても食べていけない」「仕事の受注が安定しない」「日本の商習慣に合わない」…様々な反対意見が聞こえてきました。確かに当時、イラストレーターやカメラマンなど

の一部クリエイターはフリーランスとして活動していましたが、総合的なグラフィックデザイナーがフリーランスとして独立するケースは極めて稀でした。

しかし私は決意を固めていました。日本デザインセンターで様々な一流企業のプロジェクトに携わる中で、クライアントとの直接的な関係構築の重要性と、組織に属さない自由な発想の可能性を強く感じていたのです。また、PC という新しい武器を手にしたことで、少人数でも質の高い仕事ができる確信があったことも大きな後押しになりました。

独立の日、小さなアパートの一室に机と椅子、当時としては高価だった大型 PC を設置し、私の「デザイン事務所」が産声を上げました。看板もなく、名刺だけが私の事業の証でした。最初の 1 ヶ月は鳴かず飛ばずで、不安に駆られる日々もありましたが、日本デザインセンター時代の人脈を頼りに、少しずつ仕事の依頼が入るようになっていきました。

独立から半年ほど経ったある日、大手出版社からの問い合わせがありました。文庫本のシリーズデザインのコンペへの参加依頼でした。競合は大手デザイン事務所ばかり。一人事務所の私に勝ち目はないと思われていたかもしれません。しかし、その時の私には「負ける」という発想がありませんでした。

一週間寝る時間を削って準備した企画書とサンプルデザイン。プレゼンテーションの日、大きな会議室で重役たちを前に、私は緊張しながらも自信を持って自分のコンセプトを語りました。結果は予想外の「採用」。このニュースは業界内で小さな話題となり、「フリーランスのデザイナーが大手を打ち負かした」と噂されました。

この成功を皮切りに、徐々に大きな案件が舞い込むようになりました。特に印象的だったのは、ある国立大学の全学パンフレットデザインの仕事です。従来の堅苦しい大学案内ではなく、学生の生き生きとした表情と研究の現場を前面に出した斬新なアプローチが評価され、その後も多くの教育機関からの依頼につながりました。

仕事の量が増えるにつれ、生活のリズムは完全に「仕事中心」に変わっていきました。朝早くから深夜まで、時にはそのまま徹夜で作業することも珍しくありませんでした。「むちゃくちゃだった」と表現するしかないような日々。締め切りに追われ、企画から制作、時には印刷所への立ち会いまで、すべて一人でこなす毎日でした。

「でかい PC を最大限利用」という言葉通り、当時まだ一般的ではなかったコンピューターを使いこなすことで、少ない人数でも質の高い仕事を短時間で仕上げることができました。周囲がまだ PC を「難しい機械」「単なるアシスタントツール」と見ていた時代、私はその可能性を最大限に引き出すことに情熱を注ぎました。独自のシステムを構築し、デザイン作業の効率化を図ったのです。

私がフリーランスデザイナーとして活動し始めた 1970 年代は、日本のデザイン界にとって大きな転換期でした。高度経済成長を背景に企業のデザイン意識が高まる一方で、デザイナーの働き方はまだ旧態依然としていました。そんな中で「個」の力で戦い、独自の道を切り開いていったことは、今振り返れば日本のデザイン界における一つの小さな革命だったのかもしれません。

後に多くの若手デザイナーが同じ道を選ぶようになり、「フリーランスデザイナー」という働き方が一般化していきましたが、当時はまさに未知の領域への挑戦でした。その先駆けとなる選択をした勇気と、それを成功に導いた情熱は、私の人生における最大の誇りの一つです。

## 第 5 章: コンペティションの世界と仕事仲間

フリーランスデザイナーとして確固たる地位を築いていった私の仕事の中心は、常にデザインのコンペティションでした。コンペとは、複数のデザイナーやデザイン事務所が同じ課題に対して企画・デザイン案を提出し、その中から最も優れたものが選ばれるという競争の場です。一つのプロジェクトに何十社もが参加することも珍しくなく、毎回厳しい競争が行われていました。

特に採算が良かったのは官公庁系の仕事でした。国や地方自治体、公共機関のポスターやパンフレット、シンボルマークなどの案件は、民間企業と比べて報酬が安定していました。しかし、その分競争は熾烈を極めました。有名デザイナーから新進気鋭の若手まで、業界の全ての層が入り乱れ、文字通り「デザイン界の総力戦」のような状況でした。

ある県の観光ポスターのコンペでは、最終選考に残った 5 社の中で唯一の個人事務所が私でした。他はすべて大手デザイン事務所や広告代理店のチーム。最終プレゼ

ンテーションでは、大会議室いっぱいの審査員を前に、一人で説明する緊張感は今でも鮮明に覚えています。結果は僅差での勝利。後に審査委員の一人から「組織の論理に縛られない自由な発想が評価された」と聞いたときは、フリーランスという選択に改めて自信を深めました。

「命を懸けるような思いで仕事に取り組み」というのは決して大げさな表現ではありません。一つのコンペのために何日も徹夜することは当たり前で、時には体調を崩すことも。しかし、自分のデザインが採用され、街中のポスター掲示板や駅の広告スペースに飾られるのを見たときの喜びは、その苦労を何倍にも上回るものでした。

コンペティションの世界で最も厳しいのは、「一つの仕事を獲得してもすぐに次の案件を追いかけていなければならない」永遠の緊張感です。今日の成功は明日の保証にはならず、常に次の挑戦が待っているという現実。組織に属するデザイナーであれば、会社の信用や継続的な契約によって安定した仕事量を確保できることもありますが、フリーランスには「次の仕事」への不安が常に付きまとっていました。

この厳しい世界で戦い続けるため、私は独自の「武器」を磨き続けました。一つは他者とは異なる視点でデザイン課題を捉える力。もう一つは、PC という当時はまだ珍しかったツールを最大限に活用する技術力です。夜中にひらめいたアイデアをすぐに形にできるスピード感は、大きな組織にはない個人デザイナーの強みでした。

「有名で大きな会社と競争するのは容易ではありません」という現実、時に打ちのめされるほどの厳しさを持っていました。大手デザイン事務所や広告代理店は、マーケティング部門、企画部門、クリエイティブ部門と分業制で、それぞれの専門家がチームとして機能します。対して一人のフリーランスは、すべての役割を一人でこなさなければなりません。

さらに「大手にはどんどん新しい人材が入ってきます」という状況も、個人の戦いを困難にしていました。常に新しい感性や技術、若いエネルギーが大組織には流入し続ける中、一人の個人が時代の最先端であり続けることの難しさは計り知れませんでした。

「一人でそういった大きな組織と戦うためには、並外れた精神力が必要でした」



この言葉には、勝ち目のないように見える戦いに挑み続けた日々の緊張感と決意が込められています。コンペに敗れた夜は、一人寂しく杯を傾けながら、翌日には再び机に向かう。そんな日々を支えたのは、「自分にしか表現できないものがある」という強い自負心でした。

しかし、完全な「独り戦争」ではありませんでした。「一緒に組む仲間も重要な存在でした」という言葉通り、私にとって特別な存在だったのは、同じようにフリーランスとして活動する専門家たちでした。特にコピーライターの M 氏とは、10 年以上にわたってパートナーシップを組み、多くのプロジェクトを共に成功させました。

「彼らも独立した専門家として、それぞれの分野で高い技術を持っていました」

プロジェクトごとに必要なスキルを持つフリーランスが集まり、臨時のチームを組む。大手企業のような組織力はなくとも、それぞれが自分の分野のプロフェッショナルとして最高のパフォーマンスを発揮する。そんな「フリーランス連合」は、1980 年代の日本では新しいビジネスモデルの先駆けでした。

「中には『驚くほど仕事のできる人』もいました」

特に印象的だったのは、コピーライターの S 氏です。一見無口で地味な印象でしたが、クライアントの要望をわずか数分の会話で核心まで理解し、翌日には完璧なコピーを提示する。そのスピードと精度は、まさに「驚くほど」としか表現できないものでした。

「残念ながら、一緒に仕事をしたコピーライターの方は先に他界されました」

長年の戦友だった S 氏が突然の病で倒れたのは、私が 50 代半ばの頃でした。お見舞いにお酒を送ったところ、「まだ飲めない」と返送されてきたという苦い思い出。その数ヶ月後に訃報が届いたときは、共に闘った日々が走馬灯のように思い返されました。葬儀場には彼が手がけた名作コピーが飾られ、同業者たちが静かに別れを告げました。

こうした出会いと別れを経ながらも、私のデザイナー人生は作品という形で結実し続けました。「大学のパンフレットや文庫本の表紙など、私の手がけた印刷物は今も残っています」という言葉には、創作者としての静かな誇りが感じられます。

特に記憶に残っているのは、某大学の全学部案内のシリーズデザインです。従来の堅苦しい大学案内ではなく、学生の生き生きとした表情や研究の現場の躍動感を前面に出した斬新なアプローチが高く評価され、その後 10 年以上にわたって毎年デザインを担当することになりました。その大学からは「あなたのデザインで志願者が増えた」と言われたことが、何よりの喜びでした。

また、大手出版社の文庫本シリーズのカバーデザインも私のキャリアの中で大きな位置を占めています。100 冊以上に及ぶシリーズデザインは、一冊一冊の内容を読み込んでから取り組むという地道な作業の連続でした。読者から「表紙に惹かれて手に取りました」という感想が届いたときは、デザインが本と読者を結ぶ架け橋になれたという満足感がありました。

## 第 6 章: デザイナーとしての日常と哲学

フリーランスデザイナーとしての生活は、「仕事」と「生活」の境界線が極めて曖昧なものでした。特に仕事が軌道に乗り始めた 30 代後半から 40 代にかけては、私の人生そのものが「デザイン」を中心に回っていたと言っても過言ではありません。

私の一日は早朝から始まりました。朝 5 時に起床し、誰もいないオフィスでコーヒーを片手に前日の続きを黙々と進める。クライアントからの電話対応や打ち合わせが始まる午前中は事務的な作業に集中し、創造的な作業は夕方以降に行うというリズムが自然と確立されていました。

一つの案件が大詰めを迎えると、しばしば徹夜作業となりました。当時はデジタル環境も今ほど整っておらず、最終段階での修正や調整に膨大な時間を要したのです。深夜のオフィスビルは静まり返り、時折遠くに救急車のサイレンが聞こえる中、モニターの青白い光だけが私の存在を照らしていました。

作業を終えて帰宅するのは午前 2 時、3 時になることも珍しくありませんでした。真夜中の東京の街を歩きながら、頭の中ではまだデザインの構想が巡り続けています。ふと見上げた星空や、閑散とした交差点の信号機がインスピレーションを与えてくれることもありました。そんな「デザイナーの目」は 24 時間休むことなく、世界を観察し続けていたのです。

土曜日も日曜日も、私にとっては平日と変わらない仕事日でした。むしろ電話が鳴らず、打ち合わせもない週末こそ、集中して創造的な作業に取り組める貴重な時間だったのです。家族との時間や友人との付き合いは自然と後回しになり、「仕事人間」と呼ばれることも多くなりました。

季節の移り変わりさえも、仕事を通して感じる日々。春は新年度のパンフレット制作で忙しく、夏は企業の間決算報告書、秋は年末に向けての企画物、冬は翌年の広報計画…と、一年があっという間に過ぎていきました。

ある時期、都内の渋滞を避け、効率的に移動するために 250cc のバイクを購入しました。当時のデザイナーにとって、クライアントとの打ち合わせや印刷工場での立ち会いなど、都内各所を素早く移動する必要があるのです。スーツにヘルメット姿で都内を駆け回る日々。冬の寒さや夏の暑さ、突然の雨に悩まされながらも、スケジュール通り複数の場所を回れる機動力は大きな武器でした。

バイクで印刷工場に向かう途中、信号待ちでふと見上げた空の色、古い下町の路地裏のテクスチャー、高層ビル群の規則的な反復パターン…それらすべてが私の創作の糧となりました。デザイナーにとって「見ること」は一日も休むことのできない修行のようなものです。

夜遅く仕事を終え、疲れた体と頭をリセットするために向かうのは、いつも決まった小さな居酒屋でした。一人でカウンターに座り、今日の仕事を振り返りながら熱燗を傾ける時間。それは仕事モードから一時的に解放される、私にとって貴重な「充電時間」でした。

特にお気に入りだったのは浅草の路地裏にある、創業 100 年を超える古い居酒屋でした。そこには職人や商店主、芸能関係者など、様々な業種の常連が集まり、東京の下町の生きた息遣いを感じることができました。木の温もりが感じられる古い内装、壁に貼られた黄ばんだポスターや写真、手書きのメニュー表…そのすべてが歴史と人間の営みを物語っていました。

店主の親父さんは私を「デザイン屋さん」と呼び、時々「この看板、古くなってきたから新しいの作ってくれないか」などと声をかけてくれました。実際に手がけたその看板は、今も浅草のある路地に掛かっているはずです。

この居酒屋での一杯は、単なる「酒」ではなく「文化」「歴史」「人間関係」が凝縮された体験でした。デザイナーとして人々の暮らしや感情、記憶に関わる仕事をする上で、こうした場で過ごす時間は何物にも代えがたい学びを私にもたらしてくれました。

私のデザインプロセスは常に「ストーリー」から始まりました。クライアントが何を伝えたいのか、誰に伝えたいのか、それを受け取る人はどんな反応をするのか…単なる「見た目」ではなく、コミュニケーションの全体像を描くことから着手したのです。

例えば、ある製薬会社のパンフレットをデザインする際には、実際に製薬研究所を訪れ、白衣の研究者たちが黙々と作業する姿や、精密機器が並ぶ研究環境を自分の目で確かめました。その場の空気感、音、香り、温度まで含めて「体験」することで、ただ情報を並べた冊子ではなく、研究への情熱や人間性が伝わるデザインが可能になったのです。

クライアントとの打ち合わせでは、時に厳しい意見の対立もありました。しかし私は「デザインのプロフェッショナル」として、単に言われた通りに形にするのではなく、時には反論し、時には説得し、最終的には依頼主の真の目的に寄り添うデザインを提案することを信条としていました。

1980年代後半から1990年代にかけて、デザイン業界にもパーソナルコンピュータの波が押し寄せてきました。しかし当時は専門書も少なく、ソフトウェアの使い方を学ぶ場も限られていました。多くのベテランデザイナーが新技術への適応に苦戦する中、私は直感的にその可能性を感じ取り、独学で技術を習得していきました。

最初のMacintoshを購入した日のことは今でも鮮明に覚えています。箱から取り出し、電源を入れた瞬間の高揚感。小さな画面に表示されるアイコンやフォント、グラフィック機能に、デザインの未来を見た思いでした。

独学の日々は決して簡単ではありませんでした。英語のマニュアルを辞書を片手に読み解き、ソフトの操作方法を一つひとつメモに残していく。エラーが発生すれば原因を探るために徹夜することも。しかしその過程で、誰にも教わらない「自分だけの使い方」を発見することもありました。

例えば、当時の画像処理ソフトの標準的な使い方では実現できない表現を、複数のソフトを連携させて実現する方法を編み出したり、通常は写真加工用のツールをタイ

ポグラフィ(文字組み)に応用したりと、マニュアルには載っていない技法を次々と開発していきました。

この「独自のスタイル」は、やがて私の作品の特徴として認識されるようになりました。クライアントからは「あの独特の質感」「他では見られない表現」と評価され、コンペでの差別化要因ともなりました。デジタル技術を使いながらも、どこか手作業の温かみを感じさせる表現は、父から受け継いだ職人氣質の現代的な表れだったのかもしれませんが。

コンピュータは私にとって単なる「道具」ではなく、創造性を拡張する「パートナー」でした。手では実現不可能な精度と効率、そして何より「やり直し」が容易な点は、挑戦的な表現への扉を開いてくれました。しかし同時に、スクリーン上だけで完結せず、最終的なアウトプットがどう見えるか、人の手に渡ったときどう感じられるかを常に意識していました。それは紙の質感や印刷技術、製本方法まで含めた「トータルデザイン」の視点です。

日々の仕事に追われながらも、私は小さなノートに気づいたアイデアや技法をスケッチとメモで残していきました。それは今でも残る私の「デザイン日記」であり、当時の試行錯誤の軌跡を辿ることができる貴重な記録となっています。

ある深夜、疲労の極限で思わず画面に向かって「もう無理だ」とつぶやいた瞬間、不思議な閃きが訪れることもありました。創造的な仕事の不思議さは、苦しみの先に予期せぬ発見が待っていることにあります。そして、その瞬間を求めて、私は今日も机に向かい続けたのです。

「家でそれらを眺めながら、過去の仕事に思いを馳せることがあります」

現役を退いた今でも、自宅の本棚や書類ケースには私の手がけた作品が大切に保管されています。時にはそれらを取り出して眺めながら、締切に追われた日々、クライアントとの熱い議論、印刷所での最終チェックの緊張感など、一つひとつの作品に込められた物語を思い返します。若い頃はただ必死にこなしていた仕事も、今振り返ると一つの人生の軌跡として、かけがえのない価値を持っています。

振り返れば、私がフリーランスデザイナーとして第一線で活躍できたのは、時代の変化を敏感に捉え、常に新しい表現方法を模索し続けたからかもしれません。また、デ

ザインとは単なる「見栄え」ではなく、人と人、人とモノ、人と情報をつなぐ「架け橋」であるという信念を持ち続けたことも、長く仕事を続けられた理由の一つだと思います。

デザイナーとして生きることを選んだあの日から、多くの山と谷を乗り越えてきましたが、今思えばすべての経験が私の財産となっています。そして、父から受け継いだ職人の血と精神は、デジタル時代のデザイナーとなった私の中で、静かに、しかし確かに脈打ち続けているのです。

## 第 7 章: 仕事を離れての新たな人生

長年、疾走するような緊張感と創造性に満ちたフリーランスデザイナーの生活を送ってきた私ですが、70 歳を迎える頃には、自然と仕事のペースを落としていました。「引退」という明確な区切りを設けたわけではなく、少しずつ案件を減らしていったというのが実情です。しかし、何十年もデザインに没頭してきた私にとって、突然の「何もしない時間」は想像以上に戸惑うものでした。

「これからどうやって日々を過ごそうか」

そんな迷いを抱えていた矢先、思いがけない出会いがありました。知人を通じて、原宿にあるデザイン専門学校から声をかけていただいたのです。「用務員として働いてみないか」という誘いでした。

最初は戸惑いました。かつては一流クライアントのデザインを手がけ、業界で一定の名声を得ていた身が「用務員」として働くことに、一抹の躊躇いがあったのも事実です。しかし、学校を訪れてみると、そこには若々しい創造のエネルギーが満ちていました。廊下を行き交う学生たちの活気ある声、アトリエから聞こえてくる議論、壁に貼られた実験的な作品の数々。その空気を吸った瞬間、私の中に眠っていた何かが再び目を覚ましました。

「面白そうだな」

その純粋な思いだけで、私は申し出を受けることに決めました。肩書や過去の実績にこだわるより、新しい環境で新しい経験をすることの方が、この年齢になって価値があると感じたのです。

デザイン学校での私の主な仕事は、施設の維持管理や備品の整理、時には校舎周辺の清掃など、一見するとデザインとは無縁の仕事でした。しかし、そんな「脇役」としての立場が、かえって私に新しい視点を与えてくれました。

制作に熱中する学生たちの横顔を見ながら掃除をする。教師と学生が熱心に議論する声を聞きながら備品を整理する。かつての「主役」が「舞台裏」から創造の現場を見守る経験は、デザインという営みをより客観的に、そして深く理解する機会となりました。

学生たちは最初、私のことを単なる「用務員のおじいさん」として見ていました。しかし、ある日のこと。教室で困っている学生がいるのを見かけ、思わず助言をしたのです。デザインの配色で悩んでいた学生に、色彩調和の基本原則と、その「崩し方」のコツを教えました。

「すごい！おじさん、デザインわかるんですね！」

その学生の驚きの表情が忘れられません。それをきっかけに、私の過去の経歴が学内で知られるようになり、徐々に学生たちから質問や相談を受けるようになりました。清掃の合間や放課後、時には昼休みに「ちょっと見てもらえませんか」と声をかけられるようになったのです。

「生徒さんや先生方に慕われ、ハガキやデザインの小物をいただくこともありました」

特に卒業シーズンになると、「いつも励ましてくれてありがとうございました」と手作りのカードや小さなデザイン作品をプレゼントされることがありました。そんな心温まる瞬間は、かつてのビジネスの世界では味わえなかった純粋な喜びでした。

「若い世代とデザイン談義を交わすのは楽しく、良い刺激になりました」

休憩室での何気ない会話が、いつの間にかデザイン哲学の深い議論に発展することもありました。若い学生たちの新鮮な発想や、既成概念にとらわれない自由な表現に触れることで、私自身のデザイン観も少しずつ更新されていきました。

特に印象的だったのは、デジタルネイティブ世代の感覚です。私がPCを使い始めた頃には考えられなかったような直感的な操作感覚や、境界を超えた融合的な表現方

法。時には「それは違うんじゃないか」と思うこともありましたが、多くの場合は彼らから学ぶことの方が多かったと感じています。

「小学生の子どもたちの送り迎えなどもしていました」

デザイン学校には、夏休みや週末に小学生向けのワークショップが開催されることもあり、私はその送り迎えを手伝うこともあり、まだデザインという言葉さえ知らない子どもたちが、色や形で純粋に遊ぶ姿を見守る機会に恵まれました。

ある日、一人の小学生が描いた絵に目が留まりました。技術的には稚拙でも、色の使い方に独特の感性が光る作品でした。思わず「これ、とても面白いね」と声をかけると、照れくさそうに「みんなと違うって言われるんです」と答えた少年。私は「違うからこそ価値があるんだよ」と伝え、彼の目が輝く瞬間を見ました。その子がこれからどんな道を歩むかは分かりませんが、その小さな出会いが何かの種になればと思います。

「若い方との交流は、私に多くの活力と新鮮な視点をもたらしてくれました」

年を重ねるごとに、人は知らず知らずのうちに視野が狭くなり、新しいものを受け入れる柔軟性が失われていくものです。しかし、常に新しい感性と出会い続けることで、私の心と頭は若々しさを保つことができました。時には最新のデジタルツールの使い方を学生から教わることもあり、70代にして新しい技術を学ぶ楽しさを味わいました。

学校での日々は、デザインを「教える」というより「共に考える」時間でした。私が50年の経験から得た知恵を伝える一方で、彼らの自由な発想から刺激を受ける。そうした双方向の交流こそが、創造的な活動の本質なのかもしれません。

「デザイン学校での仕事は『面白そうだから』という純粋な動機で始めたものでしたが、それは私の人生に新たな喜びをもたらしました」

振り返れば、この「第二の人生」は、第一線を退いた後の単なる時間つぶしではなく、デザイナーとしての私の経験に新たな意味を与えてくれるものでした。長年培ったスキルや知識が若い世代につながっていく実感。自分が歩んできた道が決して無駄ではなかったという確信。そして何より、「デザイン」という営みが世代を超えて連なっていくという大きな物語の一部に自分がいるという感覚。



時には掃除用具を手に廊下を磨きながら、ふと窓の外を見て思うのです。「あの頃は必死だったけれど、今思えばすべてが貴重な経験だった」と。そして、アトリエから聞こえてくる学生たちの笑い声に、未来へとつながるデザインの可能性を感じるのです。

学校での5年間は、私の人生において最も静かで、しかし最も充実した時間の一つとなりました。肩書や報酬、締め切りに追われることのない環境で、純粹に「デザイン」という創造行為の本質と向き合えたように思います。

ある卒業式の日、一人の学生が私に近づいてきました。「おじさんの話を聞いて、フリーランスのデザイナーになることを決めました」と。その言葉を聞いたとき、私は胸が熱くなるのを感じました。彼がこれからどんな道のりを歩むにせよ、私の経験の一部が彼の中で生き続けることに、深い喜びを覚えたのです。

デザイン学校での経験は、私に「継承」という新たな価値観をもたらしました。自分が築いてきたものを次の世代に受け渡していく。それは形あるものだけでなく、デザインに対する姿勢や、創造することの喜び、そして何より「目で見、手で作り、心で感じる」という人間の根源的な能力への信頼です。

用務員としての仕事を終え、学校を去る日、教職員と学生たちが小さな送別会を開いてくれました。そこで贈られた寄せ書きには「デザインのおじいちゃん、ありがとう」と書かれていました。その素朴な言葉が、私の人生における新たな肩書きとなりました。「デザインのおじいちゃん」—それは誇るべき称号だと思っています。

今も時折、元学生から近況報告のハガキが届くことがあります。デザイナーとして第一線で活躍する者、教育者の道を選んだ者、思いがけない分野で創造性を発揮している者…彼らの多様な道に、私は静かな応援を送り続けています。

デザイン学校での日々を通じて、私は「引退」というものの本当の意味を理解したように思います。それは活動の終わりではなく、これまでとは異なる形で社会や未来につながる、新たな始まりなのです。

## 第8章: 山と旅を愛する人生

デザイナーとしての激務の中でも、私の人生には仕事とは別の大切な充実があったのです。特に山登りは、私にとって単なる趣味を超えた、人生の重要な一部となりました。奥さんと共に楽しんだ山の思い出は、今でも私の心の風景として鮮やかに残っています。

「山に登る」という行為は、デザインの仕事とは正反対の体験でした。デザインが社会や他者との関わりの中で生まれる創造活動だとすれば、山は自然と自分自身だけがある原初的な世界。その対比が、私の心と体のバランスを保ってくれたのだと思います。

山登りを始めたのは 30 代半ばのことでした。最初は軽い気持ちで奥さんと低山に登ったのですが、その日の夕暮れ、山頂から見た景色に言葉を失いました。遠く都会の喧騒を離れ、空と大地がこれほど壮大につながる世界があったのかと。その日から私たち夫婦は「山の虜」になったのです。

休日があれば山に向かう生活が始まりました。最初は丹沢や奥多摩の比較的近い山々から始め、少しずつ経験を積んで北アルプス、南アルプスへと範囲を広げていきました。登山用具を揃え、体力をつけ、山の知識を学ぶ過程そのものが、新しい世界への探検でした。

「ある山では帰れなくなって山小屋に泊まったことも」

特に忘れられないのは、ハケ岳での出来事です。当時はまだ経験も浅く、日帰りのつもりで出かけたのですが、途中で天候が急変。濃霧に包まれ、視界は数メートル先も見えない状況になりました。頼りの地図とコンパスも、慣れない手つきでは正確な位置を把握するのに苦労します。日が傾き始めたとき、私たちは決断しました。無理に下山せず、近くの山小屋に泊まることにしたのです。

予定外の山小屋泊まりは、思いがけない贈り物となりました。夕食後、小屋の主人から山の歴史や伝説を聞き、他の登山者たちと山談義に花を咲かせた夜。窓の外では星が驚くほど明るく輝き、都会では決して見られない天の川が広がっていました。奥さんと二人、小屋の前のベンチに座り、言葉を交わさずにその景色を見つめた時間は、今でも私たちの大切な思い出です。

「遭難しそうになった経験もあります」

もっと危険だったのは、北アルプスでの出来事です。天気予報は良好だったにも関わらず、山の天気は変わりやすく、突然の暴風雨に見舞われました。岩場での足場が悪くなり、視界も限られる中、一瞬のバランスを崩して足を滑らせたのです。幸い大きな怪我には至りませんでしたが、あと数メートル崖が続いていたら...と思うと今でも背筋が寒くなります。

そんな危険な経験にもかかわらず、山への情熱は冷めることはありませんでした。むしろ、自然の力と厳しさを知ること、より謙虚に、より深く山と向き合うようになったように思います。デザインの仕事でも、時に厳しい状況や失敗から最も多くを学んだように、山での試練も私たちを成長させてくれました。

「奥さんは海外の山にも登り、プライベートでヨーロッパを一周して帰ってきたこともあります」

奥さんは私以上の山好きで、私が仕事で忙しい時期には一人で登山サークルに参加するほどでした。50代になると、さらに冒険心を広げ、スイスアルプスやオーストリアの山々に挑戦したいと言い出したのです。当時の私は大きなプロジェクトの真っ最中で同行できなかったため、奥さんは友人との小グループで海外登山に出かけました。

帰国後、奥さんが見せてくれた写真の数々。マッターホルンの勇姿、エーデルワイスの咲く高山植物の草原、石造りの山小屋と現地の登山者たちとの交流...。そして何より印象的だったのは、私の知っている奥さんとは少し違う、冒険者としての誇らしげな表情でした。

その後、奥さんはさらに意欲的になり、登山だけでなく、ヨーロッパ一周の旅に出ることを決意しました。一ヶ月以上の長旅でしたが、各地の美術館や歴史的建造物、そして何より現地の人々との出会いを通じて、多くの刺激と感動を持ち帰ってきました。それらの話を夜な夜な聞かせてもらうのが、しばらくの間の私たちの日課となりました。

奥さんの冒険は、間接的に私のデザインにも影響を与えました。彼女が持ち帰った各国のポスターやパンフレット、街角で見つけた小さなデザインの発見の数々。それらは私の視野を広げ、国際的な視点をデザインに取り入れる契機となったのです。

「スキーも楽しみました」

山登りの冬季版として、私たちはスキーにも熱中しました。最初は下手な横好きの二人でしたが、次第にコツをつかみ、北海道から九州まで、様々なスキー場を巡る旅が始まりました。パウダースノーを滑る爽快感、リフトからの壮大な雪景色、そして滑った後の温泉とビールの美味しさ。これらの経験は、厳しい仕事の日々の中での貴重な活力源でした。

特に印象に残っているのは、長野オリンピック後に訪れた白馬での滑走です。世界級のコースに挑戦し、何度も転びながらも、頂上から眺める北アルプスの山々の絶景に感動しました。スキーを通じて出会った仲間たちとの交流も、私たちの人生を豊かにしてくれました。

「そして、お酒も好きでした。85 歳になった今でも、お酒を楽しんでいます」

山登りやスキーの後に楽しむ一杯は格別でした。体を動かした後の疲れた体に染み渡る熱燗の味わいは、今でも忘れられません。若い頃は量も飲みましたが、年を重ねるにつれて「質」を重視するようになりました。全国各地の地酒を試したり、旅先で出会った珍しい銘柄を探したりするのも、私たちの楽しみの一つでした。

85 歳になった今でも、晩酌の習慣は健在です。量は減りましたが、一日の終わりに小さな盃で味わう日本酒の時間は、私の生活の中で欠かせない儀式となっています。時には昔の山登りの思い出や、仕事で苦労した日々を振り返りながら、ゆっくりと酒を味わう。そんな時間こそが、長い人生を静かに噛みしめる貴重な瞬間なのです。

山も酒も、実は「デザイン」と深い共通点があると私は感じています。自然の造形美に感動する心、酒の味わいの奥行きを感じる感性。それらはすべて、「美しさ」や「調和」を感じ取る能力につながっているのではないのでしょうか。職人が丹精込めて作った一本の酒を味わうことと、デザイナーとして作品を生み出すことは、どこか通じるものがあるのです。

人生の山あり谷ありを、実際の山登りと重ね合わせて考えることもあります。陰しい登りが続いても、頂上に立ったときの達成感。時に霧に迷っても、晴れ間が見えたときの喜び。そうした山での経験が、デザイナーとしての困難な時期を乗り越える力にもなっていたように思います。

奥さんとの山登りの思い出、海外での冒険、スキーの爽快感、そして今も続く晩酌の楽しみ。これらはすべて、仕事一筋ではなく、多面的な人生の豊かさを教えてくれた大切な経験です。デザイナーとしての私のセンスや感性も、こうした様々な体験が育んでくれたものだと感じています。

年を重ねた今、山に登ることはもうできなくなりましたが、窓から見える遠くの山並みを眺めながら、かつての冒険を思い出すことがあります。そして、「また違った形で山とつながっている」という静かな満足感があるのです。人生も山道と同じく、一步一步、自分のペースで歩み続けることの大切さを、私は山から教わりました。

## 第 9 章: 人生を振り返って

「20 歳から 70 歳くらいまで、デザイナー一筋の人生でした」

半世紀にわたるデザイナー人生は、振り返れば一本の長い川のように感じられます。時に急流となり、時にゆったりと流れ、しかし常に前へと進み続けてきた時間の流れ。若き日に都立工芸高校でデザインの基礎を学び、一流デザイナーの下で修業し、フリーランスとして独立して第一線で活躍した日々。そのすべてが今の私を形作っています。

「振り返ると本当に面白かったと思います」

この言葉には、苦労や困難も含めた人生全体への肯定感が込められています。深夜まで続いた作業、厳しいコンペでの敗北、締め切りに追われた緊張感、クライアントとの意見の衝突…。そうした「大変だった」記憶さえも、今となっては愛おしい思い出として蘇ります。何故なら、それらすべてが「自分が選んだ道」だったからです。

デザインという仕事は、本質的に「問題解決」と「美の追求」という二つの側面を持っています。クライアントの要望や社会のニーズという「制約」の中で、いかに創造性を発揮するか。その緊張関係の中で生み出される解決策こそが、デザインの醍醐味でした。一見すると矛盾する要素を調和させる喜び。それは父の桐たんすの金具づくりから受け継いだ職人氣質が、現代的な形で表現された営みだったのかもしれません。

「生きるとは何か。私にとっては『色々やることがあった。その連続だった』と言えるでしょう」

この素朴な言葉には、私の人生哲学が凝縮されています。人生とは大きな目標や成功だけでなく、日々の小さな「やること」の積み重ねではないでしょうか。一つのデザイン案を練り上げる過程、クライアントとの打ち合わせ、印刷所での最終チェック、山に登る一步一步、家族との団らん…。そうした「やること」の一つひとつが、かけがえのない人生の瞬間なのです。

「自分で面白いと思うものを選択してきました」

好奇心こそが私の人生の原動力でした。新しいデザイン手法への挑戦、コンピュータという未知のツールへの取り組み、山という自然の世界への探求。常に「面白そうだ」という直感を大切に、その好奇心に導かれるまま進んできました。時にはその選択が経済的に困難な道だったこともありましたが、「面白さ」を優先したことで、結果的に独自の道を切り拓くことができたのだと思います。

「あっという間の人生でした」

時の流れの不思議さを感じます。熱中して仕事に取り組んでいるとき、山の頂きを目指して一步一步登っているとき、そうした「今」の瞬間は長く感じられます。しかし振り返れば、すべてが「あっという間」だったという感覚。それは充実した時間を過ごしてきた証なのかもしれません。

「『何年生きようがコーヒーは美味しい』—これは私の人生哲学の一つかもしれません」

朝のコーヒーの香りと味わい。それは 20 代の頃も、50 代の頃も、そして今 85 歳になった今も変わらない喜びです。この小さな日常の幸せを感じる感覚を失わないこと。それが私にとっての「生きる喜び」の源泉です。大きな成功や達成感も確かに人生には必要ですが、それだけを追い求めると、日々の小さな幸せを見逃してしまうことになります。

「年を重ねても、日々の小さな喜びを大切にする姿勢こそが、充実した人生の秘訣なのではないでしょうか」

年を重ねると、体力は衰え、できることは限られてきます。しかし、感じる心までが衰えるわけではありません。むしろ、若い頃は気づかなかった些細な美しさや喜びに、より敏感になる側面もあります。朝日の色合いの微妙な変化、風に揺れる木々の音、久しぶりに会った人の笑顔…。そうした小さな瞬間の中に、人生の本当の豊かさがあるのではないのでしょうか。

「浅草でよく飲んだ日々の記憶は、今でも鮮明に残っています」

仕事を終えた後の一杯は、至福のひとつときでした。特に浅草の古い居酒屋での記憶は、単なる「飲酒」の記憶ではなく、東京の下町文化や人情、そして自分自身の若かりし日の感覚が複雑に絡み合った、豊かな時間の記憶です。店主との会話、常連たちとの交流、季節の料理と酒の組み合わせ…。そのすべてが、今となっては貴重な文化的経験として私の中に生きています。

「かつては奥さんを抱き上げることもできましたが、今ではそれも難しくなりました」

時の流れと共に失われていくもの、それは人生の切なさでもあります。若い頃の体力や機敏さは徐々に衰え、かつてできたことができなくなっていく現実。特に奥さんとの関係において、そうした変化を実感することは、時に寂しさを感じさせます。結婚して間もない頃、新居の玄関で奥さんを抱き上げて家に入ったあの日の記憶。山道で疲れた奥さんの手を引いて登った日々。そうした肉体的なつながりの形は変わっても、心の絆は深まる一方です。

「しかし、人生の喜びを見つける心は変わりません」

これこそが私の人生の信条です。環境は変わり、体は老いても、「喜びを見つける心」さえ失わなければ、人生は豊かであり続けることができる。むしろ、若い頃には気づかなかった小さな幸せに目を向けられるようになることで、人生の深みが増していくのではないのでしょうか。

「デザインを通じて、時代の変化を肌で感じながら生きてきました」

デザイナーという職業は、時代の最前線で社会の変化を感じ取る特権を与えてくれました。クライアントの要望や市場のトレンドを通して、人々の価値観や生活様式の変化をリアルタイムで体感することができたのです。

「戦後の混乱から高度経済成長期、バブル経済、そしてデジタル革命まで、日本社会の大きな変遷を目の当たりにしてきました」

幼少期に経験した戦争と焼け野原から始まり、高度経済成長期の活気に満ちた企業活動、バブル期の華やかさと浪費、そしてデジタル技術による仕事の革命的变化まで。この激動の時代を生き抜く中で、デザインの役割や表現方法も大きく変化してきました。手描きの時代から、写植の時代、そしてコンピュータによるデジタルデザインの時代へ。技術の変化に対応しながらも、「人の心に届くデザイン」という本質を追求し続けてきたことが、長いキャリアを支えてくれたのだと思います。

「その中で常に新しいものを学び、挑戦し続けることの大切さを実感しています」

変化を恐れず、むしろそれを成長の機会として受け入れる姿勢。それがデザイナーとして生き残るための秘訣でした。新しい技術や手法が登場するたびに、「もう歳だから」と諦めるのではなく、積極的に学び、自分のものにしていく。その姿勢は今も変わりません。デザイン学校の用務員となった後も、若い学生たちから新しいデジタルツールの使い方を教わり、それを楽しむ心を持ち続けてきました。

「若い世代への私のメッセージは、『自分で面白いと思うことを選び、それに全力を注ぐこと』」

長い人生経験から得た私の結論です。他人の期待や社会の流行に流されるのではなく、自分の直感と情熱を信じて道を選ぶこと。それが本当の意味での「自分の人生」を生きることではないでしょうか。そして選んだからには、中途半端ではなく全力で取り組む。その過程で直面する困難や挫折も含めて、すべてが自分を成長させる貴重な経験となるのです。

「そして、どんなに年を重ねても、コーヒーの味や酒の味わいを楽しむような、日々の小さな喜びを大切にしてほしいということです」

若い頃は大きな目標や成功を追い求めがちですが、人生の真の豊かさは、そうした小さな瞬間の積み重ねにあると私は信じています。朝のコーヒーの香り、夕暮れの空の色、友人との会話、家族の笑顔…。そうした「当たり前」の瞬間こそが、実は最も貴重な宝物なのかもしれません。



「人生はあっという間です。しかし、情熱を持って生きれば、その一瞬一瞬が輝きを放ちます」

時間の流れは誰にも平等です。しかし、その時間をどう生きるかは、一人ひとりの選択にかかっています。「あっという間」と感じる人生だからこそ、一瞬一瞬を大切に、情熱を持って生きることの価値があるのではないのでしょうか。デザインの仕事に没頭した日々、山の頂きを目指して一步一步登った時間、家族と過ごした穏やかな日常。それらすべての瞬間が、私の人生を彩る輝きとなっています。

「私の自分史がそのことを少しでも伝えることができれば幸いです」

この自分史を書き記す動機は、単なる記録や自己満足ではありません。私が歩んできた道、感じてきたこと、学んできたことが、誰かの人生に小さなヒントや励ましとなることを願っています。特に若い世代の方々に、「自分の感性を信じ、好きなことに情熱を注ぐ生き方」の可能性を伝えられたらと思います。

デザイナーとしての半世紀、そして人間としての 85 年の歩み。その軌跡は決して華々しいものではないかもしれませんが、一人の人間が「自分らしく」生きようとした証しとして、何かの価値があるのではないかと静かに思います。

父から受け継いだ職人の血と美意識、祖母から学んだ芸術への姿勢、戦争と復興の中で培われた逞しさ、デザインの師から得た専門知識と哲学、そして何より、共に歩んできた家族や仲間たちとの絆。それらすべてが織りなす「私の物語」が、ここに完成しました。

最後に、読んでくださるすべての方に感謝の気持ちを伝えたいと思います。この自分史が、あなたの人生に小さな光となりますように。そして、どんな時代であっても「自分で面白いと思うことを選び」「日々の小さな喜びを大切に」生きる勇気を持っていただけたら、これほど嬉しいことはありません。

人生という旅路はまだ続きます。明日の朝も、私は美味しいコーヒーを淹れ、新しい一日の輝きを感じることでしょう。

※ヒアリングをしている内容と AI を組み合わせた半フィクションになります。